

英米の俗信 (5)

小泉 直

外国語教育講座

The Superstitions of Britain and the United States (5)

Naoshi KOIZUMI

Department of Foreign Languages, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

はじめに

本稿は、英米に古くから伝わる俗信の起源と内容を明らかにすることを目的とする研究の一部を成すものである。これまでに「日用品」、「身体」、「数字」、「行為・生理現象」、「色」、「天体」、「人生」、「左側・右側と太陽回り、時計回り」に関する俗信について解説した。本稿では、新たに「飲食物」と「曜日」にまつわる俗信を取り上げる。以下の内容は、Lasne and Gaultier (1984), Pickering (1995), Radford and Radford (1969, 1975), Waring (1978), Zolar (1990)を中心に、必要に応じて他の文献も参考にしながらまとめたものである。

1. 飲食物

1.1 アーモンド (Almond)

古代ローマの博物学者プリニウス（西暦23-79）は、5粒のアーモンドを食べると酩酊が治ると助言していた。また、プリニウスはキツネが水と一緒にアーモンドを食べると死んでしまうと主張し、今でも多くの人たちがこれを信じている。

ヴィクトリア時代（西暦1837-1901）にはアーモンドが軽率さと若者の性急な行動の象徴とされていた。これは、アーモンドの花が春のあまりにも早い時期に咲くので、霜などの害を受けやすいと考えられたからである。

1.2 リンゴ (Apple)

リンゴはエデンの園で悪魔がイブをそそのかすのに使った果物とされることから、サリー〔イングランド南東部にあり、北がロンドンに接する州〕では、最初に擦ってきれいしてから食べないのは悪魔への挑戦であると言われている。しかし、このような連想があるにもかかわらず、リンゴはいたる所で神聖な物と見なされ、リンゴの木やリンゴ園を傷めることは縁起が悪いと考えられてきた。実際、17世紀に書かれた詩の中

には、リンゴの木を切った者は雌ウシ1頭の罰金を支払わなければならないと書かれている。

イギリスの一部には古代の酒宴の習慣がまだ残っていて、農夫とその家族はたいいてい十二日節（1月6日）の前夜祭にリンゴ園でホットケーキを食べ、リンゴ酒を飲む。また、酒宴の歌を歌いながら、鍋ややかんを叩いて大きな音を立てる。こうすることで悪霊が追い払われ、次の収穫が実り豊かになると考えられているからである。ダービーシャー〔イングランド中部の州〕では、もし太陽がクリスマスの日にリンゴの木を通して輝けば、翌年は豊作が期待できると言われている。

リンゴの実が1つ春まで残っていると、そのリンゴの木の持ち主の家族が死ぬことになる。また、リンゴの木が花を咲かせる時期に実をつけて熟したら、家族の中に死人が出ることになる。

リンゴの種は未来の伴侶が誰なのかを知るために使われる。いくつかの種に伴侶となりそうな人の名前を書いて自分の頬に押しつけ、最後まで落ちないで残った種が将来伴侶となる人の名前である。リンゴの柄も未来の伴侶の名前を明らかにするために使われる。若い女性がアルファベットのそれぞれの文字を唱えながら柄をねじ曲げ、柄が途中で切れたら、その時の文字が夫となる人の名前の頭文字である。未来の夫を知る方法は他にもある。リンゴを持って鏡の前に立ち、それを9つに薄く切り分ける。その後、1つひとつナイフの先に刺して鏡を覗きながら左肩の上に持っていくと、鏡の中に未来の夫の姿が現れる。この異形として、リンゴの皮をむき、それを左肩越しに放り投げると、皮のねじれた部分に未来の夫の名前の頭文字が読み取れるというものがある。どちらの方法もハロウィーンに行われる。

1.3 ベーコン (Bacon)

ベーコンは熱と便秘の治療に役立つと言われている。ただし、このような効力をもつのは盗んできたベーコンに限られる。

1.4 豆 (Bean)

デヴォンシャー [デヴォン (イングランド南西部の州) の旧称] では、豆の列の中に緑ではなく白いものがあれば、1年以内に家族の中に死人が出ると言われていた。また、デヴォンとサマセット [イングランド南西部の州] の州境では、インゲン豆は5月3日に蒔かなければ育たないと言われていた。

イングランドの中部地方東部では、ソラマメが開花している時は事故が多いと信じられていた。また、ヨークシャー [イングランド北東部の旧州] では、ソラマメの花には死者の魂が宿っていると信じられていた。さらに、ソラマメの花のにおいのする所で寝ると、悪夢を見ると言われていた。イギリスでは夏至祭前夜 (6月23日) に3粒のソラマメを隠して探させるという風習が広く存在していた。3粒のうち、1つは皮を残し、もう1つは皮を半分むき、さらにもう1つは皮が全部むかれた。豆を探す人の運命はどのソラマメを見つけるかに掛かっていて、皮がそのままのものは富を、半分むかれたものは快適な生活を、全部むかれたものは貧困を意味した。

1.5 クロイチゴ (Blackberry)

ミカエル祭 (9月29日) の日か、その後に (あるいは、一部の地方では旧暦のミカエル祭である10月10日以降に)、クロイチゴを食べると災厄に見舞われると言われている。これは、悪魔が聖ミカエルによって天国から放り出された時にクロイチゴの茂みに落ちて怪我をし、自分を傷つけた棘をののしったからであるとされる。この俗信のもう1つの由来として、この頃になるとクロイチゴは発酵したり白カビが生えたりするからというものもある。

1.6 パン (Bread)

パンは常に主食の1つであったので、無駄にしたり捨てたりするのは縁起が悪いとされ、もしそんなことをすると、後で必ずしもじい思いをされると考えられていた。また、シュロプシャー [イングランド中西部の州] では、フォークやナイフでパンを突き刺す女性は幸せなお手伝いや妻になれないと言われている。

生理中の女性はパン生地に触れてはならない。生地が膨らまなくなるからである。男の子はパン生地をこねている女性から遠ざかっている方がよい。パン生地のついた手で顔を撫でられると、大人になってもあごひげが生えなく恐れがあるからである。パンは焼く前、生地に十字の印を入れておくと、悪霊の影響から守ってくれるとされる。オーブンの中にパンを入れる作業は1人で行わなければならない。2人で行うと言いつ争いになる。もしパンを焼いている間に割れ目が入ったら、それは家族の中に死人が出る前兆である。

テーブルの上にパンを置く時はきちんと立て置かな

なければならない。さもないと、家に不幸がもたらされることになる。女性がテーブルの上にパンを上下逆さまにして置くのは非常に危険である。そのような女性は自分が娼婦で、長い時間上向きで過ごしていることをさらけ出すことになるからである。パンを切っている間に手の中で崩れたら、家族の中で言い争いが起こることになる。パンの塊に空洞を見つけたら、それは墓を表し、家族の中に死人が出る警告である。

パンはナイフの上に載せて人に渡してはならない。また、パンをナイフの刃先に刺して焼いてはならない。そんなことをすると、一生貧しいままで終わることになる。

1.7 バターつきパン (Bread and Butter)

多くの地域で、友達と一緒に歩いている時に、2人の間に誰か他の人や障害物が入り込んで来て離れ離れになっても、「バターつきパン (bread and butter)」と言えば、2人の仲が裂かれることはないと言われている。

バターを塗った1切れのパンは占いにも使われる。パンを落とした時に、バターを塗った面が下になると不運に見舞われ、バターを塗っていない面が下になると近いうちに訪問客がやって来るとされる。

皿に残った最後のバターつきパンを取るのは縁起が悪い。もし未婚女性が取ると、生涯結婚できなくなる。しかし、勧められて取るならば、愛とお金に恵まれる。

1.8 キャベツ (Cabbage)

1つの根から2つの芽が出ているキャベツを見つけたら、それは幸運の前兆である。

1.9 ケーキ (Cake)

ダラム [イングランド北東部の州] では、主婦がオーブンから取り出したケーキの最初の1切れは、切り取ると残りのケーキがべとべとになると言われている。このような場合は切り取るのではなく手で割るべきである。

1.10 ニンジン (Carrot)

毎食大量のニンジンを食べると喘息が治ると言われている。また、ニンジンを食べると視力が向上し、暗闇でも物が見えるようになる信じられていた。実際、第2次世界大戦中、ドイツ空軍よりも優れたパイロットになるように、イギリス空軍にニンジンが入った食事が与えられたという逸話がある。

1.11 サクランボ (Cherry)

上質のワインを作りたければ、ブドウ畑の真ん中にサクラの木を植えるとよい。

若い女性は食事の後「今年、来年、いつか、ない (This year, next year, sometime, never.)」と唱えながら、

自分の皿にあるサクランボの種を数えていくことで、いつ結婚できるのかを知ることができる。答えは数えた最後の種が教えてくれる。また、親指と人差し指の間からサクランボの種を天井に向けて弾き飛ばし、1回目で天井に当たれば、その人は近いうちに結婚することになる。

ケント〔イギリス南東部の州〕では、サクランボ園を訪れて、靴をサクランボの木の葉で擦らなかつたら、サクランボの種を詰まらせて死ぬことになると言われていた。

1.12 クリ, トチ (Chestnut)

トチの実 (horse chestnut) は、1つか2つポケットの中に入れておくと、腰痛、リウマチ、関節炎の痛みを取り除いてくれると言われていた。また、クリは、蜂蜜やグリセリンと一緒に煮ると、喘息などの胸の病気を治してくれると考えられている。ハロウィーンでは、その夜に戻ってくる死者の霊への供物として常にクリがテーブルの上に置かれる。

1.13 コーヒー (Coffee)

アメリカ合衆国では、コーヒーカップの表面にできる泡の動きを見れば未来が予測できると言われている。泡が自分の方へ流れてくればお金が入ってくるが、離れていくと災難に見舞われることになる。

1.14 農作物 (Crop)

農作物は東から西ではなく、北から南に蒔くべきである。(これには、北から南に蒔く方が日に当たる時間が長くなるというもっともな理由がある。) また、満月に蒔かれた農作物は月が満ちていく時に蒔かれたものよりも1か月早く収穫できるとされる。

ウェールズでは、1人の人から相続された3つの隣り合った畑から沃土を持ってきて、蒔く時に種と混ぜ合わせると、農作物の豊作が期待できると言われている。

1.15 飲み物 (Drink)

飲み物をナイフでかき混ぜてはならない。そんなことをすると消化不良を起こすことになる。

1.16 卵 (Egg)

イギリスでは卵を食べる習慣が当たり前なので、卵にまつわる言い伝えがたくさんある。

一般的に、ゆで卵は食べた後、スプーンで空の底を突き通すと運に恵まれなくなると信じられている。リンカンシャー〔イングランド中東部の州〕の北部では、ゆで卵を食べた後、殻を火の中に放り投げると、その卵を産んだ雌鶏が卵を産まなくなると言われている。コーンウォール〔イングランド南西端の州〕とデヴォ

ンシャー〔デヴォン (イングランド南西部の州) の旧州〕では、ゆで卵を食べた後、殻は壊さないといけなると考えられていた。さもないと、魔女がその殻に乗って海に行き、立派な船を沈めてしまうと恐れられた。

ダービーシャー〔イングランド中部の州〕とリンカンシャーとノッティンガムシャー〔イングランド中北部の州〕では、暗くなってから卵を集めて家の中に持ち込むのは縁起が悪いとされる。ラトランド〔イングランド中部の旧州〕などの田舎では、アヒルの卵を日没後に家に持ち帰ると孵化しないとされていた。

卵を持って流れる水の上を超えると、1つも雛に孵ることはない。

黄身のない卵は縁起が悪く、雄鶏が生んだとされる。

イングランドとの境界近くのスコットランドでは、雌鶏が一揃いの卵から雌の雛をすべて孵したら、その所有者の家族に死が訪れると言われている。アイルランドでは、ウマを所有する者が卵を食べる時は偶数個食べなければならないとされる。さもないと、ウマに危害が及ぶことになる。

未来の伴侶の名前を知りたいければ、まず卵をピンで刺して白身を水が4分の3入ったワイングラスの中に注ぎ、その後、それを少し口の中に入れて散歩に出かけるとよい。耳にする最初の名前が未来の伴侶の名前である。

船乗りは海に出ている時、卵という言葉は口にしない。代わりに「丸い物 (roundabout)」という言葉を用いる。

アメリカ合衆国には、生まれつきのあざを消すために、7日間毎朝新鮮な卵であざを擦った後、その卵を戸口の上り階段の下に埋めるという民間療法がある。

1.17 食べ物 (Food)

食事中に食べ物を落とすのは縁起が悪い。また、食べ物の残りを1晩中テーブルの上に置いたままにしておくのも縁起が悪い。それが悪魔や悪霊への供物となるからである。

囚人たちの間では皿の上に食べ物を残すのは得策ではないと考えられている。食べ残すと、出所後、食べ終えるために、また刑務所に戻る破目になると信じられているからである。

漁師の中には、自分の将来の運が悪くなるという理由から、人に魚をあげるのを嫌がる者がいる。

1.18 ニンニク (Garlic)

古代エジプト人はニンニクを神からの贈り物と考えた。キリスト教では、悪魔がエデンの園から追放される時に左足で踏んだ場所から最初のニンニクが生えたと言われている。その起源が何であれ、ニンニクは常に強力な防御の手段と見なされてきた。スコットラン

ドでは、ハロウィーンの前日に家の周りに吊るされたニンニクは悪霊を追い払ってくれると信じられていた。

ニンニクは寄生虫を駆除し、ヒステリーの発作を静め、日射病、水腫、天然痘、ペスト、ハンセン病、歯痛、おねしょなどの治療に効果があると考えられていた。イギリスでは、子守が百日咳にかかっている子供の靴下によくニンニクが入れられた。

4月にニンニクを食べると強さと勇気とその日の成功が保証されると信じられている。また、洗礼者ヨハネの祝日(6月24日)の夜に調理して翌日に食べると、1年間災厄から守られるという。

1.19 十字パン (Hot Cross Bun)

十字パンは十字の印の入った丸い菓子パンで、復活祭の伝統的な食べ物である。キリスト教以前に起源があり、元々は異教徒の春祭りで食べられていた小さなケーキであった。魔力と薬用効果をもち、かびることがないと考えられたことから、多くの家では1年間、火事や災厄の防護策として、あるいは、さまざまな病気の治療薬として1つか2つ取っておかれた。

かつて船乗りは海に行く時は難破を逃れるために十字パンを持参した。また、農夫はネズミ除けとして十字パンを1つか2つ穀物倉庫に置いていた。

1.20 レタス (Lettuce)

中世、レタスはよく媚薬の中に入れて使われた。また、若い女性がサラダで食べるか煎じて飲むと出産しやすくなると言われていた。

今では野生のレタスが不眠症の治療に使われているが、昔は頭痛、胃痛、消化不良の治療薬であった。

1.21 肉 (Meat)

ダラム〔イングランド北東部の州〕では、鍋で茹でている時に肉が縮んだら、縁起が悪いが、膨れたら、それは繁栄の印であると言われている。

1.22 牛乳 (Milk)

家の敷居に牛乳をこぼすのは得策ではない。妖精がこの飲み物に引きつけられてドアを通り抜けてくるかもしれないからである。また、牛乳を地面にこぼすと7日間不運がもたらされることになるので、この間は何かを始めるべきではない。

初めて乳搾りされた雌ウシから取られた牛乳は、今後たくさん取れることを願って青銅のたらいにためておかれた。雌ウシを売る時は、乳がよく出るようにと尻尾から毛が数本抜かれた。子ウシを生んだ後に初めて乳搾りをする時は、牛乳を浄化して感染を防ぐために、それぞれの乳房から3滴を指輪に通すことが勧められた。

足を牛乳桶の中に入れたり、火の中に牛乳を放り込んだりすると、その雌ウシの乳房からは永遠に乳が出なくなると言われている。イチジクを暖炉に放り投げても同じ災難が起こることになる。しかし、ツチボタルを家の中に入れば、乳が出なくなることはない。

雌ウシの乳房がへびに吸われたと思ったら、トケイソウの葉 (passion grass) で乳房を擦るとよい。また、売り物の牛乳には塩を1つまみ入れるとよい。そうすれば、誰もその牛乳を使って雌ウシに魔法をかけることはできない。

稲妻によって引き起こされた火事は雌ウシの牛乳で消すことができる。

炉端に桶を置いて自在鉤を搾る (milk) なら、隣人から雌ウシの牛乳を盗むことができると信じられていた。

1.23 ミンスパイ (Mince Pie)

ミンスパイは縁起がよいので、差し出されたら断ってはいけない。断ると不幸がもたらされ、それが12か月間続く。クリスマスから12日間は毎日ミンスパイを1つ食べるとよい。それぞれのミンスパイが1か月の幸福を保証してくれる。イングランド南部地方では、それぞれのミンスパイは違う家で食べなければならないと言われている。

古代ローマ時代に最初に焼かれたミンスパイは今日の物と材料が大きく異なっていて、形も楕円形であった。恐らくその形がキリストの置かれたまぐさ桶を思い起こさせたので、幸運の評判を得るようになったのであろう。

1.24 キノコ (Mushroom)

キノコには催淫剤が入っていると信じられていたので、時に媚薬として使われた。エセックス〔イングランド南東部の州〕では、キノコは満月の時なら抜いても安全であると言われている。

1.25 木の实 (Nuts)

ある地域で木の実の豊作は例年よりも子供がたくさん生まれる前兆であると言われている。

9月14日に木の実を捨てるのは危険である。この日は悪魔が木の実を集める日だからである。また、サセックス〔イングランド南東部の旧州〕では、子供たちが日曜日に木の実を拾いに行く悪魔が枝を下げて待ち構えているので、一生不運に見舞われると言われていた。

デヴォンシャー〔デヴォン (イングランド南西部の州)の旧称〕では、花嫁が教会を出る前に1袋のハシバミの実を受け取ると、子供をたくさん産むと言われていた。ただし、そうなるためには、子供がたくさんいる年配の既婚女性から受け取る必要があるとされた。

1つの殻に2つの仁のある木の実を見つけるのは縁起

がよいと考えられている。一方の仁を食べた後、もう一方の仁を左の肩越しに放りながら願い事をするという。

恋占いの儀式では、女性が暖炉の火床の上の棒の上に1対の木の実を置くことになっている。木の実が一緒に燃えたら、2人の関係はうまくいくが、離れたら恋は実らない。

1.26 ナツメグ (Nutmeg)

ナツメグポケットに入れて持ち歩くとリュウマチや吹き出物の予防になると信じられている。しかし、未婚の女性がハンドバッグに入れて持ち歩くと、老人と結婚するように運命づけられることになる。

1.27 油 (Oil)

油をこぼしてはならない。こぼすと不運に見舞われる。スプーン1杯のオリーブオイルを9日間毎朝採ると酩酊によく効き、不妊が治るとされる。人や動物が悪魔の影響を受けているかどうかを知りたいければ、1滴の油をコップ1杯の水に垂らしてみるとよい。油が広がらなければ、恐れることはないが、分離したら、悪魔が近くにいますと考えられる。

1.28 タマネギ (Onion)

タマネギを病室に吊しておけば、患者から病気を取り去ってくれる。(実際、最近の研究では、切ったタマネギは病原菌を引きつけることがわかっているので、この俗信は基本的に正しい。)

タマネギを買う時は、常に2つのドアのある店を選び、1つのドアから入ってもう1つのドアから出ていくべきである。

ロンドンでは、聖トマスの祝日(12月21日)の前夜に未婚女性が枕の下にタマネギを置いておくと、未来の夫の姿を見ることができると言われている。

イギリスでは、男子学生が鞭で打たれそうな箇所にはタマネギを擦りつけておけば痛みを感じなくて済むと長い間言われてきた。また、鞭にタマネギを擦りつけておけば、最初の一撃で鞭は折れてしまうと信じられている。

若い女性が恋人を決めかねている時は、タマネギに好きな人の名前を爪で書いて暖かい場所に置いておくとよい。最初に芽が出たタマネギが最も強い愛を示してくれる人である。

次のマザーグースの歌が示すように、タマネギは天気予報にも使われている。

Onion's skin very thin,

Mild winter coming in.

Onion's skin thick and tough,

Coming winter cold and rough.

タマネギの皮が薄ければ、穏やかな冬になる。

タマネギの皮が厚くて硬ければ、寒くて厳しい冬になる。

1.29 オレンジ (Orange)

オレンジは幸運の果物であり、恋人の間で贈り物としてあげると愛情が増すと信じられている。また、奇妙な言い伝えによると、若い男性が女性の心を射止めたいと思うなら、オレンジの周りにピンを刺し、それを脇の下にしっかりとさんはさんと寝るとよいとされる。翌日そのオレンジを女性に差し出して、その女性が食べたなら、愛情が芽生えることになる。

オレンジの白い花は純潔を象徴し、実は多産を表す。そのため、結婚式で花嫁は幸運と子宝に恵まれるようにオレンジの花を手を持つよう勧められる。

1.30 カキ (Oyster)

カキは長い間媚薬と考えられてきた。これはカキが女性の生殖器と似ていて性的興味を刺激するからであるとされる。また、カキはrのついた月でなければ食べてはならないと長い間信じられてきた。イギリスでは、聖ヤコブの祝日(8月5日)にカキを食べると決して飢え死にしないとされている。

アメリカ合衆国の東部沿岸地域では、ポケットかハンドバッグにカキの殻を1枚入れておけば常に幸運であると信じられている。

1.31 パンケーキ (Pancake)

一般的に、パンケーキは縁起がよいと考えられている。恐らくこれは薬草のような幸運を呼ぶ成分を含んでいるからであろう。懺悔火曜日¹にパンケーキを食べると次の12か月間は幸運に恵まれ、お金と食べ物に不足することはないとされる。ただし、幸運が保証されるためには夕方の8時より前に食べなければならない。この時間を過ぎて食べると不運に見舞われることになる。また、この日にパンケーキを雄鶏に投げ、もしそれを雄鶏が食べてしまったら、家族が悪運に見舞われることになる。しかし、少しだけつついて残りを雌鶏のために取って置いたら、それは幸運の印である。

1.32 パセリ (Parsley)

パセリは料理で使われる貴重な薬草で、自宅の庭で栽培されることも多いが、俗信では縁起が悪いと見なされてきた。その起源はパセリを墓の周りに植えていた古代ローマにまで遡るようである。例えば、ロンドンとサリー〔イングランド南東部にあり、北がロンドンに接する州〕では、庭でパセリを育てると年が暮れるまでに家族に死人が出ると言われている。また、オックスフォードシャー〔イングランド南部の州〕では、パセリを植え替えると庭全体が悪魔の手中に収められ、農作物がだめになると言われている。また、パ

セリの芽が出るまでに時間がかかるのは、発芽までに9回（あるいは7回）悪魔に会いに行かなければならないからであると考えられている。これを防ぐためには、土が悪魔の影響から解放される聖金曜日²に蒔かなければならない。さらに、ハンプシャー〔イギリス南岸の州〕南部では、パセリをあげることは自分の運をあげることだと信じられている。他に、女性が自分でパセリを植えるとすぐに妊娠する、望まれない妊娠をした女性は大量のパセリを食べることで中絶できるなどの言い伝えもある。

1.33 エンドウ豆 (Pea)

豆が1つしか入っていないさやを見つけたら、それは幸運の前兆である。また、殻を取り除いている時に9つの豆の入ったさやを見つけたら、それを左の肩越しに投げて願い事をするといふ。その願いは叶えられることになる。

未婚の若い女性が9つの豆が入ったさやを見つけたら、それを台所の戸口の上にある横木の上に置くとよい。ドアを通った最初の男性が未来の夫となる人である。

9つの豆が入ったさやでいぼが治ると考えられている。さやでいぼを擦り「いぼ、いぼ、乾いてなくなれ (wart, wart, dry away)」と言いながら放り投げるとよい。

1.34 モモ (Peach)

イングランド北部地方では、秋になる前にモモの木の葉が落ちるのは家畜の伝染病が流行る前触れであると言われている。

1.35 胡椒 (Pepper)

嫌な客を帰らせたかったら、その客の椅子の下にひとつまみの胡椒を撒いておくとよい。

多くの人とはどんな胡椒も媚薬になると信じている。熱がある時は胡椒を食べてはならない。食べると熱が上がりと考えられているからである。

テキサス〔アメリカ合衆国南西部の州〕では、黒胡椒をまぶした綿を耳の中に入れておくと耳の痛みが治ると言われている。また、チリ・ペパー（チリトウガラシのさや）を丸ごと飲み込むと風邪が治るといふ。

1.36 プラム (Plum)

ウェールズでは、プラムの木が12月に花を咲かせると、その木の所有者の家族に死人が出ると言われている。

1.37 ジャガイモ (Potato)

16世紀にジャガイモが初めてヨーロッパに紹介された時は媚薬としての効用があると信じられていた。し

かし、この俗信は長くは続かず、今日では、ズボンのポケットに入れて持ち歩くとリューマチによく効くと考えられていてい

ジャガイモを植える日については2つの相反する俗信が存在する。1つは土が悪魔によって影響を受けることがないので、聖金曜日³に植えるべきであるというものであり、もう1つは聖金曜日に植えると不作になるというものである。後者の俗信は、キリストの十字架上で死を記念する日に地面に鉄の道具を使うことに対して、かつて強い嫌悪があったことと関係しているようである。

サザールランド〔スコットランド北部の旧州〕では、新しいジャガイモを初めて掘り出した時には、家族全員で味合わない、ジャガイモの精が腹を立てるので長持ちしないとされていた。

アメリカ合衆国では、ジャガイモの入った鍋の水が沸騰してなくなったら雨になると信じられている。

1.38 カボチャ (Pumpkin)

カボチャはキュウリやヒョウタンと同様、その形と大きさで種の多さから多産の象徴と見なされてきた。

カボチャを指差してはならない。さもないとすぐに腐ってしまうことになる。カボチャは聖金曜日⁴に植えると最もよく育つ。カボチャの種は人の性欲を抑制すると言われている。また、カボチャの種をつぶして油と混ぜて皮膚に塗るとそばかすが消えるという。

ハロウィーンでは、カボチャに顔が彫られ中に蝋燭が灯される。こうした魔術的なカボチャはこの特別な晩に徘徊する悪霊を追い払ってくれると考えられている。

1.39 塩 (Salt)

よく知られた俗信の1つに、塩をこぼしたら、ひとつまみの塩を左の肩越しに撒かないと悪運に見舞われるというものがある。これは悪魔が後ろと左側、つまり不吉な側から攻撃してくると考えられているからである。塩を撒いておけば、問題が起こる前に悪魔を追い払うことができる。

昔、塩は大変貴重なものだったので、よくお金として使用されていた。実際、salaryという言葉は手当を意味するラテン語のsalariumに由来する。

イングランド北部地方では、赤ん坊が生まれて初めて家から出かける時は、卵と塩と1切れのパンと少しのお金を持たせると生活に必要な物に決して不自由することはないと言われている。

塩の入った小袋はよく魔除けとして首に掛けられる。迷信深い人は、家具を搬入する前に、新居の敷居の上に少量の塩を撒き、テーブルの上に塩入れを置く。暗くなって出かける時に不安を感じる人は手の中に少しの塩を握る。

船乗りの間では、塩が海それ自体を象徴するので、塩という言葉は海上で口にしてはならない禁句であった。一方、造船業者は船と乗組員の安全を安全が保たれることを期待して建設中の船の厚板の間に塩を撒く。

塩は友情の印なので、自分の食べ物に自分で塩をかけるのは得策ではない。一緒に食事している人にかけてもらうべきである。また、塩入れを倒してしまったら、友情がこわれる危険が生まれる。さらに、「塩を勧めることは悲しみを勧めること (Help to salt, help to sorrow)」という古い言い回しが示すように、一緒に食事をしている人に塩を差し出すべきではない。

塩は未来を占うためにも使われる。ウェールズでは、クリスマスイブにテーブルの上に塩を1盛り置き、それが夜の間に融けたら置いた人は1年以内に死ぬことになり、変化しなかったら高齢まで生きると言われている。

1.40 茶 (Tea)

お茶を注ぐ前にポットのお茶をかき混ぜると、もめ事を引き起こすことになる。また、うっかりふたを戻し忘れたら、それは訪問者がやって来る（あるいは、地域によっては悪運の）印である。

お茶の表面に泡が浮かんでいたら飲む人がキスを受けることになる。また、お茶の茎が表面に浮かんでいるのは近いうちに訪問客がやって来る前兆である。もし茎が堅かったら訪問客は男性であり、柔らかかったら女性である。訪問客がいつ現れるのかを知りたいければ、その茎を左手の甲の上に載せ、右手で茎が落ちるまで叩くとよい。落ちるまでに叩いた回数が訪問者の到着するまでの日数である。

若い女性が一緒にいる男性に2杯目のお茶を注がせたら、不幸にもその男性の企てに屈することになる。また、お茶に砂糖を入れる前には牛乳かクリームを入れなければならない。さもないと、恋人を失う危険を冒すことになる。ロムニー〔ケント（イングランド南東部の州）西部の町の旧称〕では、男性と女性が一緒にお茶を注ぐと、2人に赤ん坊ができると言われていた。

1.41 トマト (Tomato)

古い言い伝えによると、エデンの園でイブがアダムに差し出したのはリンゴではなくトマトであるとされる。そのため、トマトは時に「愛のリンゴ (love apple)」と呼ばれる。

トマトはかつて媚薬と考えられていたので、若い女性は、少なくとも結婚するまでは食べることを恐れていた。

窓に大きくて赤いトマトを置くと悪霊を追い払ってくれると言われている。また、暖炉の上に置くと繁栄

をもたらしてくれると考えられている。そのため、トマトの形をした針刺しはお守りとして人気が高い。

1.42 水 (Water)

水は常に悪霊に対する防止効果があると見なされてきた。そのため、日が暮れてから水を家から捨てるのは縁起が悪いとされる。

沸かし湯は寝室に置いてはならない。住人に悪運をもたらすことになるからである。

ウェールズでは、クリスマスと復活祭の夜11時から真夜中に汲まれた泉の水はワインに変わると言われている。ウェールズでは、また、洗礼者ヨハネの祝日（6月24日）の前日の真夜中に重要な泉から汲んだ流水には治癒的な特性があり、1年間新鮮なままであるという。

1.43 ワイン (Wine)

母親の結婚指輪を浸したワインを痩せた子に飲ませると太らせることができる。

爪の切り屑をワインに混ぜると、それを飲んだ人はすぐに酔っぱらうことになる。

ワインは、偏頭痛や風邪に効き、熱を下げ、消化を助けると言われている。また、狂犬病は嘔みついたイヌから毛を2、3本採り、それをグラス1杯のワインに入れて飲むと治るといふ。

サリー〔イングランド南東部にあり、北がロンドンに接する州〕では、病弱な子供に聖餐式⁵で使われたワインを1滴与えれば丈夫になると言われている。

グラス1杯のワインを海に注ぐと嵐が鎮まるといふ。

2. 曜日

曜日はそれぞれ独自のもち、特定の俗信と結びついている。古代の占星術師はそれぞれの曜日を月・水星・金星・太陽・火星・木星・土星（すなわち、天動説における7つの天体）のいずれかに対応させ、その天体との関係がその曜日の特性を決めると考えた。

マザーグースには生まれた曜日がその人の運命を決めるという歌がある。

Monday's child is fair of face,
 Tuesday's child is full of grace,
 Wednesday's child is full of woe,
 Thursday's child has far to go,
 Friday's child is loving and giving,
 Saturday's child works hard for his living,
 And the child that is born on the Sabbath day
 Is bonny and blithe, and good and gay.
 月曜日生まれは顔立ちがよく、
 火曜日生まれは品がよく、
 水曜日生まれは悲しみに満ち、

木曜日生まれは遠くへ行き、
金曜日生まれは優しく思いやりがあり、
土曜日生まれは生活のためにせっせと働き、
安息日生まれはのんきでかわいらしく、親切で陽気。

マザーグースには、また、仕事日について次のような歌がある。

Monday for health,
Tuesday for wealth,
Wednesday the best day of all,
Thursday for losses,
Friday for crosses,
Saturday no luck at all.

月曜日は健康、
火曜日は富、
水曜日は最良の日、
木曜日は損失、
金曜日は苦難、
土曜日はまったくいいことなし。

2.1 月曜日 (Monday)

月曜日は月に支配されている。月曜日の天気はその後の1週間の天気の前を示すと言われていた。そのため、月曜日に天気が悪ければ、残りの日はよい天気が期待された。月曜日は契約を結んだり、他人に好意を求めたり、約束をしたりするのに向いていない。ただし、アイルランドでは、月曜日が1週間の中で最も縁起のよい日と見なされている。これは月を対象とした古代の信仰の名残であろう。1年には不吉な月曜日が3回あり、4月の第1月曜日はカインの誕生日、8月の第2月曜日はソドムとゴモラ⁶の破滅の日、12月の最後の月曜日はユダの誕生日（人によっては、ユダがキリストを裏切った日）に当たる。

2.2 火曜日 (Tuesday)

火曜日は戦争の神である火星に支配されているので、戦いに向いている。また、商売には最適で、結婚式をあげるのもよい。しかし、火曜日にボタン穴に花を挿すのは禁物である。女性は手術や爪の手入れを避け、火や危険な物に近づかない方がよい。

2.3 水曜日 (Wednesday)

水曜日は水星に支配されている。水曜日は病気の治療を始めたり、手紙を書いたり、機転の利く人に好意を求めたりするのに向いている。しかし、結婚したり、手袋をはめたりするのはよくない。水曜日が新月と重なったら凶である。

2.4 木曜日 (Thursday)

木曜日は木星に支配されている。木曜日は結婚式を

あげたり、重大な決定を下したり、責任のある地位に就いたり、弁護士と面会するのに向いている。しかし、ルビーを身につけたり、働いたり、ニワトリの肉を食べたり、糸を紡いだりすべきではない。新しい仕事を始めたり、子供が初めて学校に行ったりするのもよくない。

2.5 金曜日 (Friday)

金曜日は金星に支配されている。金曜日はイブがアダムにリンゴを差し出した日であり、不吉な日と考えられている。金曜日と土曜日の間の夜には悪魔と魔女が集会を開くと言われていた。かつてイギリスとアメリカ合衆国では、犯罪者を金曜日に絞首刑に処するのが習わしであった。金曜日には何かに着手してはならない。衣類は身体に合わなくなるので、切ったり縫ったりしてはならない。旅行に出かけるのもよくない。古いことわざに、金曜日に笑う者は土曜日に泣くというものがある。金曜日に生まれた子供は千里眼と熱を冷ます力を持つとされる。金曜日の夜に夢を見たら、翌朝それを家族に話すとよい。その夢は実現することになる。金曜日の天気はすぐ後の日曜日に繰り返されると広く信じられている。

2.6 土曜日 (Saturday)

土曜日は土星に支配されている。土曜日はユダヤ人にとって神聖な安息日である。土曜日は旅行に出かけるのに向いているが、1日中仕事をしたり、退院したり、善行を施したりするのはよくない。神が土曜日に人間を創られたことから、この日に少なくとも数時間は太陽が輝くと言われていた。スコットランドでは、土曜日に生まれた人は幽霊を見ることができると信じられている。

2.7 日曜日 (Sunday)

日曜日は太陽に支配されている。日曜日はキリストの復活の日であることから、1週間で最も縁起のよい日である。日曜日に生まれた子供は魔女や悪霊の影響を受けることがなく、特別な才能に恵まれている。病気の治療は日曜日に始めるとよい。この日は安息日なので、活動は慈善的なものに限るべきである。イギリスでは、この日教会で賛美歌を調子はずして歌うと、食事を焦がすことになると言われていた。アメリカ合衆国では、日曜日にベッドに新しいシーツを掛けるのは縁起が悪いとされる。

おわりに

本稿では、英米に伝わる俗信の中から、特に「飲食物」と「曜日」にまつわるものを取り上げて、その起源と内容を明らかにした。

注

- 1 復活祭より41日前の火曜日であって、その翌日、つまり灰の水曜日から始まる四旬節の断食期間の前日に当たる。教会の歴史の初期の時代から中世にかけて、この日にキリスト教徒はすべて、四旬節前の「懺悔」‘shrifts’を行うことが求められていた。このために「懺悔の’Shrove’火曜日」という名称が用いられた。また同時に、この日は、長い断食期間中に、口にすることが禁じられている肉や卵やバターなどの「贅沢な」食事を享受できる最後の日でもあった。そこで、人々は前日の「ベーコンの月曜日’Collop Monday’」に、薄切りのベーコン(‘collops’)を焼いた後、この火曜日には台所にまだ残っている卵やバターや脂身などを使ってパンケーキを作る習わしがあった。(カイトリー、チャールズ『イギリス祭事・民俗事典』p. 345を参照。)
- 2 復活祭の前の金曜日。キリストの十字架での死を記念する日で、教会暦上最も厳粛な祭日。教会の飾りつけはすべて取り外され、鐘は終日鳴りを潜めたままで、時に鳴ることはあっても甲鐘に似た調べを告げる。(カイトリー、チャールズ『イギリス祭事・民俗辞典』pp. 169-70を参照。)
- 3 注2を参照。
- 4 注2を参照。
- 5 洗礼式とともに、すべての教会において最も重要視されている sacrament (神の恩恵にあずかる儀式)。新約聖書では〈主の晩餐〉、〈パンをさく〉ことと記されている。新約に続く時代には〈エウカリスティア〉(eucharistia = 感謝)と一般に呼ばれたが、それは神の創造とキリストによる救との恩恵に対する〈感謝〉の礼拝という意味であった。6世紀以来西方教会では〈ミサ〉の名が公式に用いられ、これが今日にいたるまでローマ・カトリック教会の用語となっている。(日本基督教協議会文書事業部キリスト教大事典編集委員会『キリスト教大事典』p. 612を参照。)
- 6 旧約聖書の「創世記」に登場する死海南部の古代都市。住人の悪徳と退廃のため、天からの硫黄と火によって滅ぼされたとされる。

Radford, E. and M. A. Radford. *Encyclopaedia of Superstitions*, Greenwood Press, New York, 1969.

Radford, E. and M. A. Radford. *Encyclopaedia of Superstitions*, Edited and revised by C. Hole, London: Hutchinson, 1975.

Rhodes, C. *Black Cats and Evil Eyes: A Book of Old-Fashioned Superstitions*. London: Michael O'Mara Books Ltd, 2012.

Roud, S. *A Pocket Guide to Superstitions of the British Isles*. London: Penguin Books Ltd, 2004.

Roud, S. *The Penguin Guide to the Superstitions of Britain and Ireland*. London: Penguin Books Ltd, 2006.

The Diagram Group *The Little Giant Encyclopedia of Superstitions*, New York: Sterling Publishing Co., Inc., 2008.

Waring, P. A *Dictionary of Omens and Superstitions*, London: Souvenir Press, 1978.

Zolar *Encyclopedia of Signs, Omens and Superstitions*, London: Souvenir Press, 1990.

小泉直「英米の俗信 (1)」『愛知教育大学研究報告』第61輯 (人文・社会科学編) (2012) : 43-50.

小泉直「英米の俗信 (2)」『愛知教育大学研究報告』第62輯 (人文・社会科学編) (2013) : 53-61.

小泉直「英米の俗信 (3)」『愛知教育大学研究報告』第63輯 (人文・社会科学編) (2014) : 83-91.

小泉直「英米の俗信 (4)」『愛知教育大学研究報告』第64輯 (人文・社会科学編) (2015) : 61-69.

東浦義雄・船戸英夫・成田成寿『英語世界の俗信・迷信』大修館書店, 1974.

イギリス文化・ヨーロッパ文化関連

カイトリー、チャールズ『イギリス祭事・民俗事典』澁谷勉訳、大修館書店, 1992.

日本基督教協議会文書事業部キリスト教大事典編集委員会『キリスト教大事典』教文館, 1968.

(2015年9月15日受理)

参考文献

俗信・迷信関連

Batchelor, J. F. and C. de Lys. *Superstitious? Here's Why!*, New York: Harcourt, Brace and Company, Inc., 1954. 『アメリカの迷信さまさま』横山一雄訳、北星堂書店, 1962.

Braysher, C. M. *Collins Gem Superstitions*, London: HarperCollins, 1999.

Lasne, S. and A. P. Gaultier. *A Dictionary of Superstitions*. New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1984.

Lys, C. de. *A Treasury of Superstitions*. New York: Gramercy Books, 1996.

Oliver, H. *Black Cats and April Fools*. London: John Blake Publishing Ltd, 2006.

Opie, I. and M. Tatem. *Oxford Dictionary of Superstitions*. Oxford: Oxford University Press, 1989. 『英語 迷信・俗信事典』山形和美監訳、大修館書店, 1994.

Pickering, D. *Cassell Dictionary of Superstitions*, London: Cassell, 1995. 『カッセル英語俗信・迷信事典』青木義孝・中名生登美子訳、大修館書店, 1999.

Potter, C. *Touch Wood: An Encyclopaedia of Superstition*. London: Michael O'mara Books Ltd, 1990.